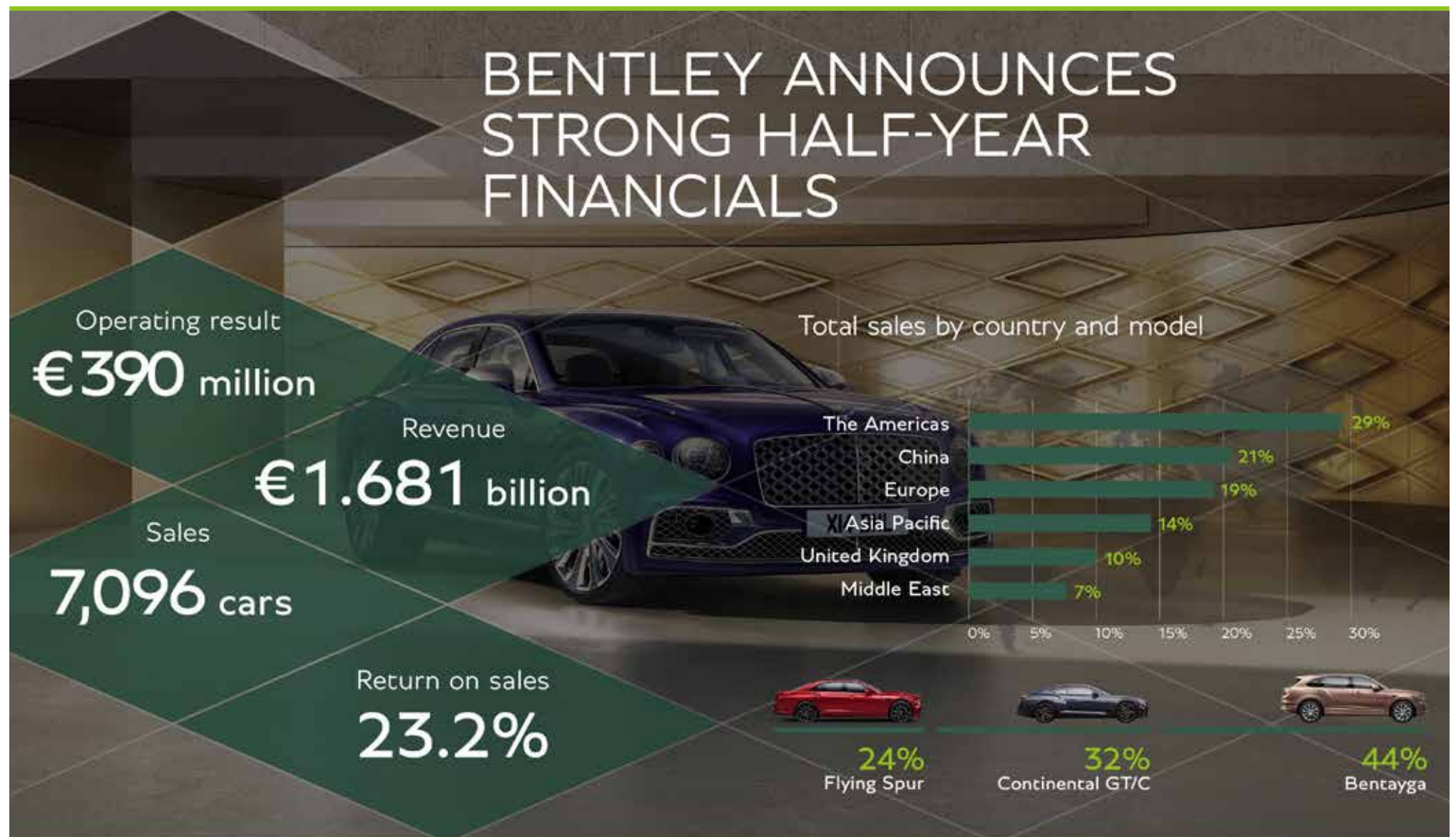


RETAILER ACADEMY NEWS

Aug 2023 | Bentley Motors Japan



ベントレーの2023年上半期決算 売上、営業利益ともに微減もAPACは健闘

ベントレー モーターズがこのほど発表した2023年上半期(1～6月)決算によると、営業利益は前年同期比2%減の3億9,000万ユーロとなりました。売上高も2%減の16億8,100万ユーロと微減しましたが、マリナーのパーソナライゼーションや、派生モデルおよびオプションに対する人気は極めて高い水準を維持しています。売上高利益率は23.2%とほぼ横ばいでした。

全世界での販売台数は4%減の7,096台でした。車種別の内訳は、ベンティガが44%、フライングスパーが24%、コンチネンタルGTとコンチネンタルGTCが合わせて32%でした。市場別では、最大市場の南北アメリカが2,065台(±0%)、中国本土・香港・マカオが1,512台(7%減)、欧州が1,340台(12%減)でした。日本が含まれるアジア太平洋は963台(5%増)と健闘。以下、英国が688台(13%減)、中東が528台(11%増)となっています。



ア太平洋は963台(5%増)と健闘。以下、英国が688台(13%減)、中東が528台(11%増)となっています。

ベントレー モーターズのエイドリアン・ホールマーク会長兼CEOは、「上半期は、これまでの年月を通して堅実に積み上げてきたオーダーバンクが大きく寄与し、好業績を維持しました。現時点での受注予測は良好ですが、複数の主要市場で過去最高を達成した昨年の数値にはわずかにおよんでいません。下半期は厳しい状況が予想されるため、供給量や在庫を適正に管理して販売力を維持しつつ、必要に応じて何らかの調整を行う計画です」などとコメントしています。

■ ベントレー モーターズ2023年上半期決算

	2023年上半期 (前年同期比)	2022年上半期
売上高	16億8,100万ユーロ (-2%)	17億700万ユーロ
営業利益	3億9,000万ユーロ (-2%)	3億9,800万ユーロ
売上高利益率	23.2%	23.3%



■ ベントレー モーターズ2023年上半期販売台数

市場	2023年上半期 (前年同期比)	2022年上半期	2023年上半期 市場別シェア
南北アメリカ	2,065 (±0%)	2,068	29%
中国本土・香港・マカオ	1,512 (-7%)	1,612	21%
欧州	1,340 (-12%)	1,524	19%
アジア太平洋	963 (+5%)	916	14%
英国	688 (-13%)	795	10%
中東	528 (+11%)	474	7%
合計	7,096 (-4%)	7,398	100%

COMPETITOR INFORMATION



メルセデスの電動ラグジュアリー SUV メルセデス・ベンツ EQS SUV

メルセデス・ベンツ日本は、電気自動車のラグジュアリー SUVとなるEQS SUVを2023年5月29日に発表・発売しました。
ラグジュアークラスのSUVとしてはニッチな存在の電気自動車として、その反響が注目されます。

SUMMARY

- 電気自動車専用プラットフォームによるメルセデス・ベンツ初のSUVモデル
- 大容量バッテリーの搭載により、航続距離593kmを実現
- 7人の乗員がゆったりくつろげる広い室内空間
- ダッシュボード全面をディスプレイ化した“MBUXハイパースクリーン”を採用
- V2H/V2Lに対応し、外部給電器としても利用可能



EXTERIOR

- キャブフォワード+ロングホイールベースによる、内燃エンジン車とは大きく異なる新世代デザイン
- スリーポイントスターをあしらったブラックパネルと、左右のヘッドライトを視覚的につなぐLEDライトバンドによる、電気自動車専用のフロントマスクを採用
- ランプの内側に曲線的な螺旋構造を採用したLEDリアコンビネーションランプが未来感を演出
- シームレスデザインに加え、ベルトライン上に配置したドアミラー、格納式のシームレスドアハンドル、ランニングボードなどにより空力性能を向上
- スポーティなAMGラインエクステリアは、EQS 580 4MATIC SUV Sportsに標準。EQS 450 4MATIC SUVにはオプションとして設定



TECHNOLOGY

- フロントとリアに電気モーターを搭載。前後で駆動力を連続可変配分する4MATICを全車に標準装備
- EQS 450 4MATIC SUVは、最高出力360PS[265kW]、最大トルク800Nmの電気モーターを搭載
- EQS 580 4MATIC SUV Sportsは、最高出力544PS[400kW]、最大トルク858Nmの電気モーターを搭載
- エネルギー容量 107.8kWhの大容量リチウムイオンバッテリーを搭載。EQS 450 4MATIC SUVでは航続距離593km、EQS 580 4MATIC SUV Sportsは航続距離589kmを実現
- オフロード走行を支援するオフロードスクリーンと、フロント下方の路面状況を仮想的に表示するトランスペアレントボンネット機能を標準装備
- CHAdeMO規格を利用したV2Hで住宅と車両との間で双方向充電が可能。また、外部給電機のV2L機器を通じて電気機器への給電が可能
- 最大150kWの急速充電に対応。月額基本料金と充電料金が初年度無料となるMercedes me Charge専用充電カードが付属



INTERIOR

- 3枚の高精細ディスプレイを1枚のガラスで覆ったMBUXハイパースクリーンは、EQS 580 4MATIC SUV Sportsに標準。EQS 450 4MATIC SUVにはオプションとして設定
- 2列目シートには前後130mmの電動スライド機能を標準装備。電動バックレストは前方に14度、後方に4度リクライニングさせることが可能
- リアエンターテインメントシステム、コンフォートアームレストなどにより2列目の室内空間をより快適にする、ショーファーパッケージをオプション設定。
- 40:20:40分割の2列目シートと50:50分割の3列目シートを装備。ラゲッジスペースは、7人乗車時で195Lを確保。2列目シートを倒した状態では最大2,020Lまで拡張可能
- 大型HEPAフィルターは、A2サイズのフィルターと約600gの活性炭でPM2.5-PM0.3クラスの粒子状物質を最大99.65%以上除去



PRICE

メルセデス・ベンツ EQS 450 4MATIC SUV:	15,420,000円(税込)
メルセデス・ベンツ EQS 580 4MATIC SUV Sports:	19,990,000円(税込)

COMPETITOR INFORMATION

ニューモデル 受注開始：2023年5月29日 / デリバリー：2023年第四四半期以降

BMW i7 eDrive50/M70 xDrive



- ・BMW 7シリーズに2つの電気自動車モデルを追加。計9種類のモデルラインアップに
- ・BMW i7 eDrive50は、455PS (335kW) ・650Nmの電気モーターを搭載した後輪駆動モデル。0-100km/h加速は5.5秒。バッテリーの総エネルギー量は105.7kWh。一充電走行可能距離は約575-611km
- ・BMW i7 M70 xDriveは、前後アクスルに電気モーターを2基搭載した4輪駆動のMハイパフォーマンスモデル。合計出力は659PS (485kW) ・最大トルクは1,015Nmで、0-100km/hは3.7秒。一充電走行可能距離は488-560km

車両価格 (税込)	BMW i7 eDrive50 Excellence:	15,980,000円
	BMW i7 eDrive50 M Sport:	15,980,000円
	BMW i7 M70 xDrive:	21,980,000円

一部改良 受注開始：2023年6月1日 / デリバリー：未定

ランドローバー・レンジローバー スポーツ 2024年モデル



- ・マイルドハイブリッド化した3.0L直6 INGENIUMターボチャージドガソリンエンジンと、同エンジンに105kWの電動モーターを組み合わせたPHEVをラインアップに追加し、すべてのパワートレインをハイブリッド化
- ・従来センターコンソールに配置していたスイッチ類をインフォテインメント「Pivi Pro」内に統合
- ・4.4L V8ツインスクロールターボチャージドガソリンエンジンを搭載した初年度限定モデル「RANGE ROVER SPORT SV EDITION ONE」を招待を受けた顧客にのみ販売

車両価格 (税込)	主なグレード	
	RANGE ROVER SPORT S D300:	11,310,000円
	RANGE ROVER SPORT AUTOBIOGRAPHY P400:	14,990,000円
	RANGE ROVER SPORT DYNAMIC SE P550e:	15,750,000円
	RANGE ROVER SPORT AUTOBIOGRAPHY P550e:	18,500,000円

特別仕様車 受注開始：2023年6月28日 / デリバリー：2023年7月以降

メルセデスAMG SL63 4MATIC+ Motorsport Collectors Edition



- ・F1マシンのMercedes-AMG F1 W13 E Performanceをモチーフにした、世界限定100台、日本では17台限定となる特別仕様車
- ・車両先端から後輪前部までのハイテックシルバー、後輪部分以降のオプシディアンブラックをグラデーションにより組み合わせた専用ツートーンペイント。さらに車体後部にスターパターンを施することでF1のグラデーションペイントを再現
- ・ボディ下部と21インチAMG 10ツインスポークアルミホイールのリムフランジにPETRONASカラーを施した専用エクステリアを採用

車両価格 (税込)	メルセデス AMG SL 63 4MATIC+ Motorsport Collectors Edition:	40,000,000円
--------------	--	-------------

一部改良 発売：2023年5月31日 / デリバリー：未定

ランドローバー・レンジローバー 2024年モデル



- ・PHEVモデルの出力を40PS向上させ、新たに「P550e」として追加。V8モデル「P530」をマイルドハイブリッド化し、すべてのパワートレインをハイブリッド化。「SV」のV8ガソリンエンジンモデルの最高出力を530PSから615PSにパワーアップ
- ・SV BESPOKEサービスを新たに導入。最大391種類のインテリア、230色のエクステリアカラー、さらにSV BESPOKE MATCH TO SAMPLEペイントサービスで顧客が求めるカラーを再現
- ・全モデルに電動ディブロイアブルサイドステップを標準装備。「D300」を除く全車にアダプティブオフロードクルーズコントロールを標準装備

車両価格 (税込)	主なグレード	
	RANGE ROVER SV P550e (SWB):	26,730,000円
	RANGE ROVER AUTOBIOGRAPHY P530 (LWB / 7シート):	24,160,000円
	RANGE ROVER SV P615 (SWB):	28,580,000円
	RANGE ROVER SV P615 (LWB):	31,710,000円

一部改良 発売：2023年6月29日 / デリバリー：未定

メルセデスAMG GT63 S 4MATIC+



- ・改良型のAMG RIDE CONTROL+エアサスペンションを採用。ダンパーの外側に2つの圧力制御バルブを追加することで、ホイールのリバウンド側と収縮側をそれぞれ個別に制御することが可能に
- ・MBUX インテリア・アシスタントとMBUX AR ナビゲーション、最新世代のAMG パフォーマンスステアリングホイールを標準装備
- ・ボディカラーおよびインテリアカラーに新色を追加

車両価格 (税込)	メルセデス AMG GT63 S 4MATIC+:	28,500,000円
--------------	---------------------------	-------------

ニューモデル 発売：2022年6月26日 / デリバリー：未定

アウディ A8 60 TFSI e quattro/ A8 L 60 TFSI e quattro



- ・アウディ初のquattro四輪駆動システムを搭載したプラグインハイブリッドモデル。標準ホイールベースのA8とロングホイールベースのA8 Lの両モデルに設定
- ・3.0L V6 TFSIエンジン+電気モーターの組み合わせにより、システム最大出力340kW、最大トルク700Nmを発揮。0-100km/h加速4.9秒
- ・総容量17.9kWhのリチウムイオンバッテリーと最大出力100kW(136ps)の電気モーター、センターデフ式quattroシステムにより、EVモードで最大航続距離54km(WLTCモード)の四輪駆動走行が可能

車両価格 (税込)	Audi A8 60 TFSI e quattro:	13,200,000円
	Audi A8 L 60 TFSI e quattro:	14,850,000円

ベントレーがオリーブタンレザーを開発 24MYのベンティガから採用

ベントレー モーターズはこのほど、世界で最もサステナブルなラグジュアリー モビリティのリーダーを目指すBeyond 100戦略の一環として、初の完全オーガニック オリーブタンレザーのオプションを導入すると発表しました。この新しいオプションは、サステナブルな素材への信頼性を高めるためにベントレーが研究・開発に取り組んできた事例の1つで、次のステップに向けて重要な役割を担います。オリーブタンレザーは、8月18日に米国・カリフォルニア州で開催されたモントレー カーウィークで発表され、24MYのベンティガから採用され、他モデルにも順次展開される予定です。



オリーブタンレザーの特徴は、オリーブオイル製造時に出る有機副産物を使用したサステナブルな皮革のなめし加工にあります。オリーブを圧搾する際に抽出される排水を原料とするこのなめし剤は、有害な金属やミネラル、アルデヒド等の物質を含みません。従来のなめし工程よりも水の使用量は少なく、再生可能な化学物質の濃度も高くなります。仕上がったオーガニックレザーは驚くほど柔らかく、世界で最も人気のあるラグジュアリーブランドにふさわしい品質はしっかりと保たれています。オリーブ圧搾廃水 (OMW) 技術は皮革なめし業者のPasubio SpA社のもので、ベントレーはこの技術を自動車メーカーとして初めて採用しました。

ベントレーのレザー専門家であるマーク・スタングは、「レザーはベントレーのインテリアに不可欠な要素であり、ベントレーの特徴的

な仕上げを生み出すために重要な要素です。また、耐久性に優れており、これまで製造されたベントレーの84%が現在も英国の道路を走っていることから、特に重要な素材なのです」と、ベントレーにとってレザーの重要性を強調。そのうえで「ベントレーでは1台につき8～12枚の皮革を使用しており、すべてEU圏内で調達しています。さらにベントレーは森林破壊につながる皮革の使用を避けており、環境への影響に配慮するプロセスを奨励するサプライチェーンの取り組みを反映しています」などと語っています。





グッドウッドでベントレーが存在感を示す ヒルクライムや“新車”のSpeed Six披露で

7月13～16日に開催されたグッドウッド フェスティバル オブ スピード (FoS) で、ベントレーが存在感を示しました。
特に注目を集めたものをあらためてご紹介します。

ヒルクライムに6台がエントリー



FoSの名物といえば、グッドウッド ヒルクライムです。今年は6台のベントレーがエントリーしました。そのうちの1台が、英国でのデビューとなったパトゥールで、耐久試験用のプロトタイプであるカー・ゼロ・ゼロでした。さらにル・マンの最後の優勝から20年を記念して製造されたコンチネンタルGT ル・マン コレクション (GTCも含む)、W12エンジンの20周年を記念して製造されたフライングスパー Speed エディション12、2019年のパイクスピークで市販車部門の新記録を樹立したコンチネンタルGTパイクスピークと、W12エンジン搭載車が出場しました。これに加え、ブローワー コンティニュエーションシリーズのエンジニアリングプロトタイプ「カー・ゼロ」も出走。観客はそれぞれのベントレーの勇姿を目に焼き付けました。



Speed Sixカー・ゼロをお披露目



今年のFoSでは、Speed Sixコンティニュエーションシリーズのエンジニアリングプロトタイプ「カー・ゼロ」を世界で初めて公開しました。このSpeed Sixは、1930年のル・マンで活躍した「オールドNo.3」とSpeed Six (GU409) の実車を参考に製造されました。可能な限りオリジナルの図面を使用し、1929年と1930年のル・マンで変更されたレギュレーションを反映した仕上げとなっています。FoSのベントレーブースで展示されたこの車両は今後、実際の使用条件での耐久性とサーキットでのテストなどで使用された後、ベントレー本社で保管される予定です。



W12ヘリテージパレード



今年はベントレーの6.0リッター W12エンジンが誕生して20周年です。これを記念して、12台のW12エンジン搭載車によるパレードを実施しました。ヒルクライムに出場した5台のW12エンジン搭載車に加え、ベントレーのヘリテージコレクションから、7台が追加されました。追加されたのは、初代コンチネンタルGT、初代コンチネンタル フライングスパー、2011年にユハ・カンクネンにより氷上での新記録を樹立したコンチネンタル スーパースポーツ ISR、生産車第1号車のベンティガW12、2代目フライングスパー W12 S、2018年にパイクスピークで市販SUV部門の新記録を樹立したパイクスピーク ベンティガ、2代目コンチネンタル スーパースポーツです。



ベンティガ EWB が牽引車の新記録樹立



ベンティガ EWBが再生可能燃料を使用し、非公式ながらヒルクライムでトレーラー牽引車の新記録「1分21秒」を樹立しました。使用した燃料は藁を原料とする第2世代のバイオ燃料で、トレーラーにはベントレーが改造なしで約1,760kmを走行可能な燃料に相当する2.5トンの藁が積まれていました。安全上の理由から、この走行はFoS開幕前の準備期間中に行われたため、公式記録とはなっていません。しかし、この第2世代バイオ燃料は、ヒルクライムに出走した6台のベントレーにも使用されたため、エンジンや車両に改造を施す必要がなく、性能や航続距離も変わらない完全な互換品になることを示したという点で、大きな意味がありました。



バイオ燃料タンクをクルーに設置 FoSで互換品としての性能を証明



ベントレー モーターズはこのほど、クルー工場に1,200リットルのバイオ燃料タンクを設置し、稼働を開始しました。これは藁を原料として作られる第2世代のバイオ燃料で、EN228規格に適合。車両に改造を施すことなく通常のガソリンと同様に使用することができ、103年前のEXP 2でも無改造で使用可能です。ベントレーの広報車やヘリテージコレクションの車両は今後、通常のガソリンを使用した場合と比較して、ウェル・トゥ・ホイールでCO2排出量を85%削減することができます。

7月のグッドウッド フェスティバル オブ スピード (FoS) では、この燃料を使用した6台の車両をヒルクライムに出走させ、バトゥールはわずか55.0秒でコースを駆け抜けました。また、非公式ながらベンティガ EWBは、2.5トンもの藁を積載したトレーラーを牽引して1分21秒で完走。ガソリンの互換品としての性能を証明しました。

耕地で栽培された食用作物を原料とする第1世代のバイオ燃料と異なり、第2世代のバイオ燃料は、農林廃棄物や食品産業の副産物などの廃棄物を使用しています。廃棄物のバイオマスが発酵により分解され、エタノールが生成されます。このエタノールを脱水するとエチレンに変換され、このエチレンが短い炭化水素分子を鎖状につなぎ合わせてより長くエネルギー密度の高い分子を生成する「オリゴマー化」の過程を経て、ガソリンに変換されます。廃棄物を利用する第2世代バイオ燃料は、第1世代バイオ燃料で指摘されていた「食料vs 燃料」のジレンマの回避も実現しています。

マニフアクチュアリング担当取締役 アンドレアス・リーヘが就任



ベントレー モーターズはこのほど、アンドレアス・リーヘが9月1日付でマニフアクチュアリング担当の新取締役役に就任することを発表しました。リーヘは今年6月にCEOとしてCARIADに移ったピーター・ボッシュの後任で、エイドリアン・ホルマーク会長兼CEOの直属となります。

アウディ AGからベントレーに移るリーヘは、直近ではアウディで戦略計画部門の責任者として、生産戦略や生産およびロジスティクスのデジタル化、関連するグローバル生産ネットワークの継続的な開発に携わってきました。また、アウディメキシコ時代にも複数の要職を歴任。フォルクスワーゲン グループで最も成功した近代的塗装工場の立ち上げにも貢献してきました。

リーヘは今後、ベントレーの製造部門全体と密接に関わりながら、デジタル化を推し進めて環境負荷の少ない、世界をリードする製造施設である「ドリームファクトリー」の実現に向けて力を発揮していきます。

リーヘは新たな職責を担うことについて、「ベントレー モーターズに入社することは、私のキャリアにおいて非常にエキサイティングな新たな1ページとなります。チームは確実に組織を変革し、Beyond 100 戦略の推進は、ラグジュアリーカー セグメントで最も大胆な計画になるはずです。同僚とともに、完全な電動化を成功させることを楽しみにしています」などと抱負を語っています。

英国コミュニティへの新投資戦略 ベントレーが150件以上の助成金を寄付



ベントレー モーターズはこのほど、英国のコミュニティを支援する投資プログラム「アドバンシング ライフ チャンシーズ (ALC)」を導入しました。Beyond 100 戦略の一環で、チャリティー協力基金(CAF)とのパートナーシップで開発されたこのプログラムにより、ベントレーは地域社会への投資実績を英国全土にまで拡大できることになります。

この一環として、ベントレーは2022年11月から小規模助成金プログラムを開始。これまでに英国全土で150件以上の小規模助成金を寄付しており、今年末までに250件以上の寄付を目指しています。

ベントレーはこれまで、クルー本社のあるチェシャー地方を中心とする地元コミュニティを支援してきた長い歴史があります。しかし2023年に新たに「ベントレー クライシス基金」と「ベントレー アドバンシング ライフ チャンシーズ クルー基金」という2つのプログラムを立ち上げ、さらに広い地域コミュニティへの投資ポートフォリオへと拡大する予定です。とりわけチェシャー コミュニティ財団 (CCF) と協力し続けながら、「CCF クルー基金」の中で重要な役割を果たしていきます。これらのサポートは、ベントレーの社員が参加できる新しい寄付およびマッチファンディング プログラムとともに開始されます。

エクストラオーディナリー ウーマン クルー本社でメンタープログラム実施



ベントレー モーターズが、若い女性にSTEM (S: 科学、T: テクノロジー、E: 工学、M: 数学) 領域や自動車業界でのキャリアを考えてもらうために実施しているエクストラオーディナリー ウーマン プログラムで、英国内とサウジアラビアから計8人の学生が、クルー本社で行われたメンタープログラムに参加しました。彼女らはベントレー本社に滞在中、ベントレーの製造オペレーションの舞台裏を見学したり、自動車業界のシニアリーダーらと意見交換したりする貴重な機会を得ました。

2回目となる今回のプログラムでは、クルー訪問に先立ち、「ベントレー パイオニア」として特別に選ばれたメンターが各学生に割り当てられ、定期的に指導してきました。パイオニアとして参加したのは、RIBA スターリング賞を受賞した建築家や航空宇宙エンジニアを含む8名です。

英国のウォーリック大学で自動車工学を専攻するガウリ・モルジャリアさんは、「プログラムはとても興味深いものでした。ベントレーのエンジニアやスタッフと会って話すことができ、彼らのキャリアや情熱について学ぶことができたのは素晴らしい経験でした」などと語りました。パイオニアの1人としてこのプログラムに参加した建築家のアマンダ・レベット氏は、「これは男性優位の自動車業界に、恵まれない背景を持つ若い女性の参入を奨励する素晴らしい取り組みです。素晴らしいメンティーを紹介してくれたベントレーに感謝します」などとコメントしています。

世界の先進運転支援システムの最新機能いろいろ

日々進化を続けるのが自動車の技術です。近年、その進化の度合いが大きいのが先進運転支援システム（ADAS）です。
今回は、ブランドごとに、どのような先進運転支援システムの機能を持っているのかを説明します。

アウディのコミュニケーションするライト

アウディは、昔からライティング技術の革新に取り組んできたブランドです。最近では、数多くのLEDを組み合わせるマトリクスLEDヘッドライトが多数のモデルに採用されています。このヘッドライトシステムは、数百万もの照射パターンを実現しており、狙った場所だけを照射することで、関係ないドライバーや歩行者に眩しさを与えることができます。また、オプションとして熱を感じるサーマルカメラを備えることで、夜間の人や動物が発する熱を感知してディスプレイに表示することが可能となっています。

さらに最新技術として、この7月に第2世代のデジタルOLED（有機LED）を発表しました。これはリアライトの点灯をデジタル制御することで、複数のライト表示を変化することが可能。表示を変更することで、クルマと他車がコミュニケーション（Car-to-X）できるのです。



2023年7月にアウディが発表した第2世代のデジタルOLED。均一で高いコントラストの光を実現します。



リアのエクステリアライトの光らせ方を変化させることで、他車とコミュニケーションをとることができます。

BMWの自走した経路を覚える機能

BMWは、2019年にいち早く「ハンズ・オフ機能付き渋滞運転支援システム」を日本に導入しています。これは、高速道路などの自動車専用道において、渋滞時に限って、ハンズ・オフ（手離し）運転を可能とする機能です。ただし、自動運転レベル2相当なので、運転手は周囲を警戒する義務があり、問題が発生しそうなときは、運転手がすぐに運転操作に戻ることが求められています。

そんなBMWの最新モデルとなる「5シリーズ」（2023年7月発売）には、「パーキング・アシスト・プロフェッショナル」という機能が備わっています。これは、時速35km以下で自車が直前に前進したルートを最大200mまで記憶。その同じルートをバックで正確に戻ることができる機能です。狭い道ですれ違いできないときに、安全かつ正確にバックすることができます。



BMWは2019年より「ハンズ・オフ」機能を導入。自動車専用道で、渋滞時に限って作動します。



最新モデルには、直前200mまでの走行軌跡を記憶して、自動でバックする機能や、自動で駐車する機能が備わります。

メルセデス・ベンツのAR機能

最新のメルセデス・ベンツの「Sクラス」に採用されたユニークな機能が「AR（拡張現実）ナビゲーション」です。これは、ナビゲーション画面に、現実の景色が表示され、その中に進むべき進路に矢印が重ねて表示されるというもの。さらに「Sクラス」では、フロントウィンドウに投影するヘッドアップディスプレイにも「AR（拡張現実）機能」がオプションとして用意されました。これは世界で初の装備となります。

また、先進運転支援システムではありませんが、「Sクラス」では、世界初となる後席左右のSRSリアエアバッグも装備されています。これは前席の裏にエアバッグが収納されており、前席にチャイルドシートを使用している場合、問題なく機能するものとなります。



カーナビゲーションの進行方法を示す矢印を、ヘッドアップディスプレイに表示する「AR（拡張現実）ナビゲーション」。



世界初となる後席左右のSRSリアエアバッグを装備しているのも、最新の「Sクラス」の特徴です。

ホンダの国内初のレベル3の内容

国内初の自動運転レベル3を実現したのが2021年に発売されたホンダ「レジェンド」の「ホンダ・センシング・エリート」です。自動運転レベル3は、一定の条件下で、システムがドライバーに代わって運転を行うもの。運転手がハンズ・オフ（手離し）だけでなく、周囲の警戒も行わなくてよいのが特徴です。ただし、問題が発生したら、すぐさま運転操作をドライバーに代わるのが条件です。他にあるレベル2のハンズ・オフとは、「よそ見をしてもいい」という点が最大の違いとなります。その実現のために、カメラ、レーダー、ライダーというセンサーだけでなく、3次元の高精度地図、全球測位衛星システム（GNSS）、ドライバーモニタリングといった装備・機能が使用されています。また、現実のところ、自動運転レベル3は、これ以外のクルマには実用化されていません。



自動運転レベル3を実現した「ホンダ・センシング・エリート」。ハンズ・オフのときに、よそ見をしても許されます。



「ホンダ・センシング・エリート」は、センサーとしてカメラ/レーダー/ライダーが搭載されています。

レクサスのOTAとハンズ・オフ機能

レクサスの最新の先進運転支援システムが、2021年4月に「LS」に追加された「アドバンス・ドライブ」機能です。カメラ、レーダーにライダー、ドライバーモニターといった装備を用いて、一定の条件下でハンズ・オフ走行を可能とします。また、ソフトウェアの無線通信でのアップデート、いわゆるOTA（オーバー・ザ・エア）機能も備えています。高速道路でのジャンクションや出口への分岐、低速車の追い抜きなどの支援も行います。

歩行者との衝突を避けるプリクラッシュセーフティでは、ブレーキ制御だけでなく、ステアリングをアクティブに制御して避ける支援機能も備わっています。



ソフトウェアのアップデートを無線通信で行う、OTA機能も備わっています。



プリクラッシュセーフティでは、ブレーキだけでなくステアリングも制御が行われます。

日産のプロパイロット2.0の仕組み

日産の先進運転支援システムは「プロパイロット」と呼ばれます。その最上位となるのが、ハンズ・オフ機能を備えた「プロパイロット2.0」です。2019年に「スカイライン」で初採用となり、今年4月に発売となったミニバン「セレナ e-POWER」の最上位グレードにも搭載されています。カメラとレーダーに加え、3次元の高精度地図、全球測位衛星システム（GNSS）、ドライバーモニタリングによってシステムが構成されます。一定の条件下で、ハンズ・オフでの走行を可能とします。地図データを備えるため、カーブやジャンクションでの速度調整も行います。また、渋滞時だけでなく、通常的高速走行を可能としているのも特徴です。



日産は2019年の「スカイライン」で、時速100kmでのハンズ・オフ機能を実現しています。



4月に発売となった「セレナ e-POWER」では、ミニバン世界初のハンズ・オフを実現しました。